

いた。校正もれもややおおい。

わたしはここに神俣伝をかいた。まえにかいたものを抄録するような形でかき、飛ばし読みのため年を一つまちがえて、それは小関恒雄氏からご指摘いただいた。弁解めくが、ちいさな誤りはさげがたい。といつても、かなり基本的な事項についての誤りは問題である。東京大学精神科の教授は、呉秀三の洋行中は片山國嘉が代行した、あるいは三宅が三代目である、とかかかれている。じつは片山は精神病学講座を兼担していた、教室のあった巢鴨病院へも週に二、三回いつていたことはわたしの『私説松沢病院史』（一九八一年）にもしるした。であるから、精神科の教授は榭―片山―呉―三宅―内村とつながり、三宅は四代目教授になる。「東京大学医科大学」なるものは存在しなかった。土田獻が「上田」姓になっていることも問題で、精神医学史の根本的事項が根づいていないことをそれはしめしている。

齋藤玉男の姓が「斎藤」としるされていることもいだけない。わたしも旧字体から新字体への切り換えのあと、「斎」と「齋」とをしばらく混同していた。今の人で新字体をみずからつかわれる人のもはべつにして、姓名は旧字体でかくのが適當だと、わたしはかんがえている。

外国の学者につきかくにしても、日本に関係した事項があるものについては、くわしくふれてほしい（たとえばモーゼンイ原著による『精神病約説』。また関連して日本の学者にふれるのに、やたらに「名誉教授」を（そうでない人にも）つけるの

はやめてほしい（肩書きをつけるなら、その時点のものにすべきだろう）。林、下田がならぶが、この二人が同級であったことにもふれてほしかった（しかも、分裂病の病理について二人は反対の見解に達していた）。

最後に、編者に索引に目をおすことをお願いしたい。自著の索引をつくると、おもしろいけれども、おもしろいものがある。本書のばあい、筆者校正後の時間が充分にあったのだから、編者が索引および全体に目をおしていれば、この本は「精神医学史の学問を根づかせ」る（編者序文から）よい基盤となつたはずである。

これ、望蜀のたぐいか。

（岡田 靖雄）

〔ワールド・プランニング・東京都港区赤坂二―二〇―一三、電話〇三―三三二四―一八四五、一九九四年、A5判、上二九〇頁、下三〇九頁、上・下とも三八〇〇円〕

日野秀逸著

『保健活動の歩み 人間・社会・健康』

本書は、その研究過程において、一貫して衛生行政思想および医療政策論を考究してきた著者の最近著の一つである。

本書は、その「まえがき」にもあるように、『保健婦雑誌』医学書院に一九八六年から一九八八年にわたって連載された「公衆衛生の歴史をたどる」が基礎稿となっている。さらに著者の記すところによれば、その連載にあたって骨格となつ

た文献は、著者と野村拓氏との共著『医療経済思想の展開』（医療図書出版社、一九七四）と著者の単著『健康と医療の思想』（労働旬報社、一九八六）であるという。評者の卑見によれば、前二著に比して、本書はより通史性が明確であり、健康と医療についての思想的展開の論述にとどまらず、それらの思想と深く相関をなした医学と医療の歴史的事実についても多くの筆が割かれている。

本書の内容を把握するために、いわゆる「章立て」に相応する見出しを列記しておこう。「はじめに」を除いた本書の章に相当する区分は二〇であり、「一、原始共産制社会の保健活動」「二、古代の保健活動」「三、最初の科学的医学—ギリシヤ医学とヒポクラテス」「四、差別的医療観の形成」「五、理性的健康観の登場」「六、古代ローマの保健活動」「七、中世の保健活動」「八、公衆衛生と医療の担い手の変遷」「九、ルネサンス期の保健活動」「十、初期資本主義時代の保健活動」「十一、市民革命と保健・医療」「十二、医学の展開—啓蒙主義のパラダイム」「十三、産業革命後のイギリス社会」「十四、公衆衛生法成立の要因」「十五、人間的諸活動を中心に据えた健康観」「十六、近代的保健医療の確立」「十七、看護改革とナイチンゲール」「十八、近代の保健・医療の限界」「十九、保健国策—戦争政策として登場した日本の厚生省と保健所」「二〇、現代の保健・医療—平和と人権と参加」となっている。この本編に続いて「補論、医療・労働・科学・技術等の用語について」が付されている。

次に、本書の特徴と考えられる点について評者の見解を示したい。第一に指摘できる点は、後述のような留保はあるにせよ、原始社会から二〇世紀にいたる保健活動のあゆみを、その思想構造の変遷と実践活動の様態をできるかぎり相関させながら把握しようと努め、それを記述していることである。著者もしばしば引用しているG・ローゼン、川喜田愛郎、橋本正己らの業績は、事実史について後世の範となる記載を残しているが、本書における史実記載が一定の健康思想・医療思想の構造を明確にする意図と構成を有しているという点では、既存の諸著を凌いでいるのではあるまいか。

第二の点は、著者が医学的事実について該博であることは当然としても、社会科学、ことに経済学と政治思想史について驚くほど知悉していることである。特にイギリスにおける経済史的記述や啓蒙思想の概説は、要を得てかつ繁に過ぎない。ごく近年の専門書についても把握している点も敬服に値いする。

第三の点は、おそらく評価の分かれるところであろうが、著書が構成している健康思想および医療政策思想の構造が、明確に史的唯物論に準拠している点である。特に「十五、人間的諸活動を中心に据えた健康観」では、K、マルクス、E・エンゲルスの労働概念の規定と労働疎外論を考察の中心とし、人間を動物から区別する活動として、自然に対する合目的な価値の生産過程としての労働を健康概念の重要な契機と解釈している。この点をもってしても、著者が誠実に史的

唯物論の立場から、人間の自由意志にもとづく合目的・意識的な価値創造の営為としての労働を十全に保障する条件としての健康のあり方を追求していることは瞭然としている。

その他にも、ナイチンゲールについての著者の独自の解釈や、長興專齋の衛生行政思想、著者の学位論文の主題ともなった後藤新平の衛生行政思想などの日本の保健思想史についても学ぶところの多い章が少なくない。

本書が健康思想と保健活動についての通史的概説として従来の類書を超える詳述と論点の明示を含んでいることだけを取り出しても、研究史にあたる影響とその意味は多大である。しかし、それにも優る本書の意義は、たとえ評価はさまざまであろうとも、一定の分析視角から一つの人間の実践のあゆみを分析して、そこに通底する問題の構造を明確にする研究手法が医学史や医史学においても成り立つことを一つの成果を通して実証したことにあるのではあるまいか。

最後に評者からの要望を述べれば、社会医学における社会衛生学の展開についていく分でも紙幅を割いて欲しかったこと、「技術」「労働」について、いわゆる「技術論争」における「労働手段体系説」と「客観的法則性の意識的適用説（武谷説）」の相違について付言して欲しかったことを記しておきたい。いうまでもなく、評者の要望が本書において満たされていないことが、本書の学術的意義を損うものではない。今後の筆者のさらなる著述を鶴首したい。

(瀧澤 利行)

〔医学書院・東京都文京区本郷五―二四―三、電話〇三―一三八
一七―五六〇〇、一九九五年、A5判、二三五頁、三二九六円〕

ステュアート・スピッカー著

石渡隆司・酒井明夫・藤原博訳

『医学哲学への招待』

本書は、アメリカの生命倫理学の重鎮であるステュアート・スピッカーの「医学哲学」に関する一二編の論考を収録した論文集である。「医学哲学」という学問分野は、我が国ではまだ一般的なものではなく、またアメリカにおいても著者自身が認めているように誕生して間もなくまだ進行過程にある。著者によれば、「医学哲学」とは自然科学と人文科学、医療現場における実践的な営みと人間性の理論的な営みを橋渡しするものである。医学上の実践すなわち臨床の場における諸問題を哲学的に考察するヘメタ医学として、「医学との共同作業としての医学倫理」とは区別されねばならない。「医学哲学」は、二元論的な形而上学を乗り越え、臨床医学の対象となる生きた身体をその全体において捉え、医学を構成する諸概念（「病氣」・「病理」・「治癒」など）や、医学的実践の前提となる諸概念（「病因」・「臨床的判断」・「脆弱性」など）の分析を通じて新たな医学像を再構築する試みである。

それでは、著者の考える「医学哲学」とは具体的にいかなるものなのであろうか。それは、本書を構成する三部のテーマから伺い知ることができよう。